

教育の質向上支援プログラム(EEP)実績報告書(事後評価用)

部局名	医学部保健学科					
申請者(部局長)	大喜 雅文					
1. 取組の名称	教育力セルフマネジメントプログラムの構築					
	(副題)					
2. 取組実施担当者						
ふりがな	氏名	担当学府・学部・職名	現在の専門	役割分担		
おおいけ みやこ	大池 美也子	医学研究院・保健学部門・教授	看護学	代表者		
ささき まさゆき	佐々木 雅之	医学研究院・保健学部門・教授	診療放射線技術科学	プログラムの広報と評価		
はしぐち のぶこ	橋口 暢子	医学研究院・保健学部門・准教授	看護学	プログラム作成と評価		
のと ひろこ	能登 裕子	医学研究院・保健学部門・講師	看護学	プログラム作成と評価		
かつた ひとし	勝田 仁	医学研究院・保健学部門・教授	検査技術科学	プログラムの広報と評価		
3. 経費措置額 (単位:千円)	年 度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	合計	
	取組規模	千円	1,500千円	2,400千円	3,900千円	
	内訳	経費措置額	千円	1,000千円	1,600千円	2,600千円
	内訳	部局負担額	千円	500千円	800千円	1,300千円
4. 各年度の実施計画と達成状況 (実施計画と達成状況の対応関係がわかるように記載すること。)						
(取組計画書の「各年度の実施計画」から転記すること。)			達成状況			
<p>平成26年度</p> <p>1. 5領域(準備編、実践編、評価編、改善編、統合編)に関する教育関連の設問・解説・評価を作成する。</p> <p>2. 設問・解説によるセルフマネジメントとして、オンラインによるプログラムを開発する。</p>			<p>1. 下記アドレスにホームページを開設し、本プログラムとリンクした。 (http://web.shs.kyushu-u.ac.jp/EEP/)</p> <p>2. 九州大学Web学習システムを活用し、医療・看護学の教育に関する書籍や文献などに基づきながら、5領域の各編に概要と設問20題を作成した。本プログラムへのアクセスは、学内と学外からの登録者のみに限定し、オンラインによるプログラムとして整備した。</p>			
<p>平成27年度</p> <p>3. オンラインによる本プログラムを整備し、医療人育成に関わる教員に発信する。</p> <p>4. アクセス件数やセルフマネジメントの結果から、本プログラムを評価する。</p>			<p>3. 本プログラムの情報発信とともに登録者をリクルートし活用化に取り組んだ。</p> <p>1) 平成27年日本看護学教育学会第25回学術集会(徳島)の交流集会にて発表し参加者との意見交換を行った(アンケート回答者45名)。</p> <p>2) 九州大学医学部保健学科FDにて、本プログ</p>			

ラムを活用した（参加者55名）。3）医学教育ユニットの会（全国医学教育に関わる教員から構成される）や全国看護系大学に対してメールや郵送により、本プログラムについて情報を発信した。4）大学院教育（科目名「看護教育論」）の教材として活用し、受講者3名（看護職者）と意見交換を行った。

4. プログラムの登録者は98名（学内68名、学外30名）、アクセス件数は405件、であった。アンケート（交流集会）では、「教育活動の改善に役立つ」や「プログラムの必要性」などの項目で、「そう思う」の肯定的評価が80～90%であり、自由記述では、本プログラムの必要性や期待が記載されていた。また、FDでは、今後役立つことやテーマの適切性について、76～82%が肯定的評価であり、自由記述では、教員にとって必要な内容であることが記載されていた。本プログラムをFDで継続的に行う要望も書かれていた。大学院教育の教材としては、教育経験の少ない院生にとって、教育に関する知識を得る資料となり、大学教育に対する理解を深めることができた。また、本プログラムの内容で、教育に関する専門用語の難しさが取り上げられた。概要や設問に関する文章表現の改善し、本プログラムの充実を図ることが今後の課題となった。

5. 取組に係る具体的な成果 (教員の意識向上等取組の波及効果等)

1. 医療・看護系教員の教育力に関する意識の向上

日本看護学教育学会第25回学術集会交流集会と保健学科FDのアンケート結果から、本プログラムに対する肯定的評価を得た。また、本プログラムの登録者（看護教育者5名）より、本プログラムが新人教員にとって必要であることや教育の改善に役立つことについて記載があった。これらから、医療・看護系の大学教員が、本プログラムを通して教育に対する学習を受けていないことを自覚し、教育実践の知識獲得に向けた意識の向上につながった。

2. 本プログラムの継続的な必要性

同上のアンケート結果には、教員の教育力向上のために、本プログラムの必要性が記載されていた。このため、本プログラムが大学教員の教育に関わる知識の提供に貢献できるプログラムであることが確認された。これまでの登録者とともに、今後も新たな登録者を加えながら、継続していくことが、本プログラムに対する要望に繋がる。

3. FDや大学院における教育者育成に向けた教材としての活用

本プログラムをFDや大学院学生に使用し、大学教員としての立場や教育に関する知識獲得に貢献できることが確認された。このため、大学院生やTAを対象とした、将来の教育者としての関心や意欲を高めるオンライン教育教材として使用できる可能性がある。

6. 今後の課題 (本取組成果の今後の課題について記載すること。)

本プログラムを継続的に活用していくため、Web学習システムからMoodleへ移行する作業とともに、登録者に対してアクセスするアドレスの変更と新たなアドレスについての連絡を行っている。今後は、Moodleを活用し下記の課題に取り組む。

1. 本プログラムの整備と改善

- ・本プログラムの活用において、専門用語の難しさが、設問・課題の量などについても改善が必要となった。
- ・教育に関する専門用語への理解を深めるために、本プログラム5領域の概要と設問の内容を修正し洗練化を図る。
- ・医療・看護系教員の活用を促進するために、本プログラムの概要を集約する。

2. 国際性のある教育教材の開発

- ・海外の医療・看護系教育では、教育者のコアコンピテンシーが明示されてきている（WHO, Nurse educator core competenciesなど）。国内の取り組みのみに留まらず、海外に向けた発信が不可欠である。
- ・本プログラムの英文化を図り、大学院教育の英文教材として活用を進める。
- ・我が国における医療・看護系に関わる教育者に対する教育教材として海外に発信する。

3. 本プログラムの継続的な発信と活用の促進

- ・断続的ではあるが、ユニットの会員から現在も登録希望者があり、対応している。また、本プログラムを開設した期限が十分とはいえず、本プログラムを継続して取り組み、活用を図りながら、成果を具体的に明示していく必要がある。
- ・ユニットの会をはじめ、医療・看護系の教育者に対する情報発信を継続的に行い、登録者の増加を図る。
- ・本プログラムの活用を、5領域に焦点をあてて具体的に明示していく。

7. 他部局あるいは全学の取組として利用できる点
(提供可能な成果を具体的に記載すること。)

- ・本プログラムは、医療・看護系の教員を対象としており、全国組織である医学教育ユニットの会に対して本プログラムを配信している。このため、医療・看護系の教育に関わる関係者への拡大を図ることができる。
- ・大学教員として備えておく知識を含めており、他部局あるいは全学における教員のFDの教材としても利用できる。
- ・九州大学のMoodleを使用して構築しているため、九州大学の大学院生、T A、新人教員などを対象とした教育に関わる人材育成に幅広く活用できる。